

Hamaguchi, Masahiro Yamamoto, Noboru Takata, Kimura Akio, Takao Koike, Fumitake Gejyo, Shuzo Matsushita, Takuma Shirasaka, Satoshi Kimura, Shinichi Oka.: Successful efavirenz dose reduction in HIV-1-infected individuals with cytochrome P450 2B6 *6 and *26, *Clinical Infectious Diseases*, 2007, in press

学会発表

- 1) Rumi Minami, Masahiro Yamamoto, Asuka Horita, Tomoya Miyamura, Kensuke Izutsu, Eiichi Suematsu: HIV-Tat protein increased the expression of apoptosis-associated protein RCAS1 in CD4+ cells and monocytes, Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, July 2, 2005, Kobe
- 2) Seiichi Ichikawa, Mioo Satoh, Makoto Utsumi, Tetsuro Onizuka, Masahiro Yamamoto, Hirokazu Kimura: Preventive enlightenment by gay CBO in Japan, Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, July 3, 2005, Kobe
- 3) Hiroshi Hasegawa, Masahiro Yamamoto, Seiichi Ichikawa et al.: Intervention in vulnerable community-A case study of intervention in a gay community in Fukuoka, local city in Japan, Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, July 2, 2005, Kobe
- 4) 南留美, 山本政弘: 高熱を繰り返したのち発症したHIV-1陽性 HHV-8関連Castleman病の一例, 第19回日本エイズ学会学術集会・総会, 平成17年12月1日, 熊本
- 5) 杉浦 互, 瀧永博之、吉田 繁, 千葉仁志, 浅黄 司, 松田昌和, 岡 慎一, 近藤真規子, 今井光信, 貞升健志, 長島真美, 伊部史朗, 金田次弘, 浜口元洋, 上田幹夫, 正兼亜季, 大家正義, 渡辺香奈子, 白阪琢磨,

山本善彦, 森 治代, 小島洋子, 中桐逸博, 高田 昇, 木村昭郎, 南 留美, 山本政弘, 健山正男, 藤田次郎: 新規HIV-1感染者における薬剤耐性の頻度に関する全国疫学調査-2003年から2004年にかけての報告, 第19回日本エイズ学会学術集会・総会, 平成17年12月2日

- 6) 辻麻理子, 山本政弘, 城崎真弓, 井上 緑, 山田淳子, 本松由紀, 矢永由里子, 佐野正: 医療と行政による検査/相談/医療の環境改善を目的とした取り組み -多職種による講義と実践の研修会を通して-, 第19回日本エイズ学会学術集会・総会, 平成17年12月1日, 熊本
- 7) Rumi Minami, Masahiro Yamamoto: HIV-Tat protein increased the expression of apoptosis-associated protein RCAS1 in CD4 + cells and monocytes, XVI International AIDS Conference in Toronto, Canada, 13-18 August 2006.
- 8) 辻麻理子, 山本政弘, 城崎真弓, 井上緑, 健山正男: ブロック拠点病院、拠点病院、行政間の連携における出張研修の効果, 第20回エイズ学会学術集会・総会, 平成18年11月30日, 東京
- 9) 南留美, 高濱宗一郎, 山本政弘: HIV感染症におけるHHV-8 DNA測定 of 臨床的意義の検討, 第20回エイズ学会学術集会・総会、平成18年12月2日, 東京
- 10) 藤野真之, 瀧永博之, 吉田繁, 千葉仁志, 伊藤俊博, 浅黄司, 松田昌和, 岡慎一, 近藤麻理子, 今井光信, 貞升健志, 長島真美, 伊部史朗, 金田次春, 濱口元洋, 上田幹夫, 正兼亜希, 大塚正義, 渡辺香奈子, 白阪琢磨, 森治代, 小島洋子, 中桐逸博, 高田昇, 木村昭郎, 南留美, 山本政弘, 健山正男, 藤田次郎, 杉浦互: 2003-2005年の新規HIV-1感染者における薬剤耐性頻度の動向, 第20回エイズ学会学術集会・総会, 平成18年12月2日, 東京

- 11) Rumi, Minami, Yamamoto, Masahiro, Horita, Asuka, Miyamura, Tomoya, Izutsu, Kensaku, Suematsu, Eiichi: Human herpesvirus 8 DNA load in leukocytes of HIV-1 infected patients: Correlations with thrombocytopenia, 7th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, Aug 24, 2007, Sri Lanka
- 12) Ichikawa, Seiichi, Satoh, Mioo, Utsumi, Makoto, Onizuka, Tetsuro, Yamamoto, Masahiro, Kimura, Hirokazu: Preventive Enlightenment by Gay CBO in Japan, 7th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, Aug 24, 2007, Sri Lanka
- 13) Noriyo Kaneko, Masahiro Yamamoto, Kyung-Hee Choi, Yasuharu Hidaka, Seiichi Ichikawa: Cell Phone Survey Using RDS to Investigate MSM' s Social Networks and HIV Risk Behaviors in Japan, 7th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, Aug 24, 2007, Sri Lanka
- 14) 山本政弘：シンポジウムHIV陽性者の治療認識(Treatment Literacy)-医療現場と自助活動の連携・協働の可能性を探る-医師の立場から見た治療情報の提供, 第21回日本エイズ学会シンポジウム, 平成19年11月28日, 広島
- 15) 南 留美, 高濱宗一郎, 安藤 仁, 城崎真弓, 長与由紀子, 山本政弘：Western blot法にて長期間陰性が持続しているHIV-1陽性者の1例, 第21回日本エイズ学会, 平成19年11月28日, 広島
- 16) 辻 麻理子, 城崎真弓, 長与由紀子, 南 留美, 高濱宗一郎, 安藤 仁, 井上 緑, 山本政弘：当院でのHIV感染症患者におけるメンタルヘルスについて, 第21回日本エイズ学会, 平成19年11月28日, 広島
- 17) 高濱宗一郎, 山本政弘, 南 留美, 安藤 仁, 城崎真弓, 長与由紀子：当院におけるHAART導入患者での骨粗鬆症の評価, 第21回日本エイズ学会, 平成19年11月28日, 広島
- 18) 安藤 仁, 山本政弘, 南 留美, 高濱宗一郎, 城崎真由美, 長与由紀子：腹部超音波検査による脂肪肝の有無と抗HIV療法に関する検討, 第21回日本エイズ学会, 平成19年11月28日, 広島
- 19) 南 留美, 安藤 仁, 高濱宗一郎, 城崎真弓, 長与由紀子, 山本政弘：HAARTによる脂質代謝異常と高分子アディポネクチンの関連, 第21回日本エイズ学会, 平成19年11月28日, 広島

図1:九州におけるHIV感染者/AIDS患者累計報告数

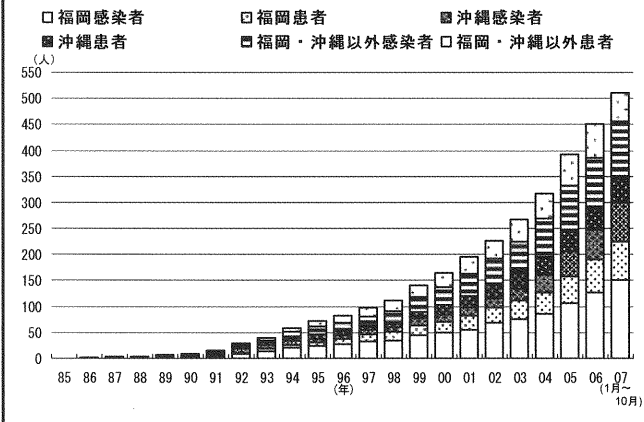


図2:九州医療センター受診患者数

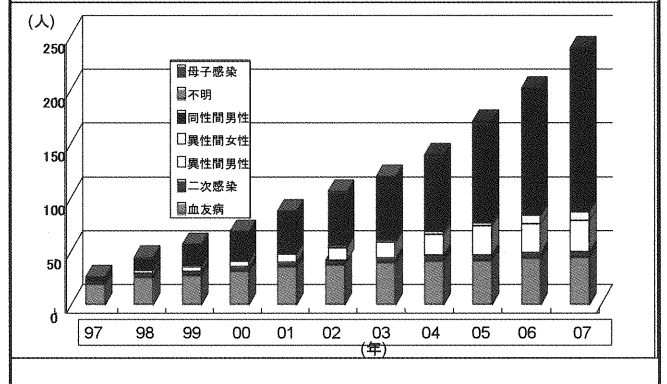


図3:新規に感染が診断された患者の解析

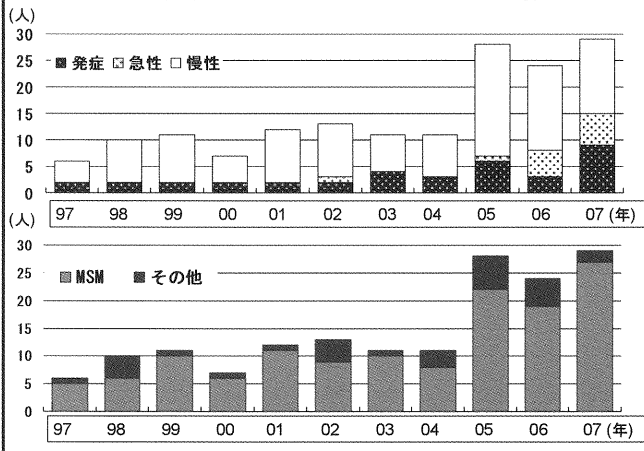


図4:平成17~19年新患のうち新規に感染が判明した患者の当院初診時年齢分布

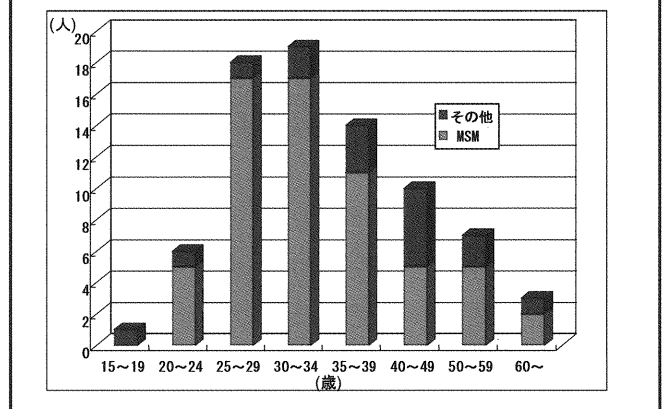


図5:新規に感染が判明した患者の判明契機

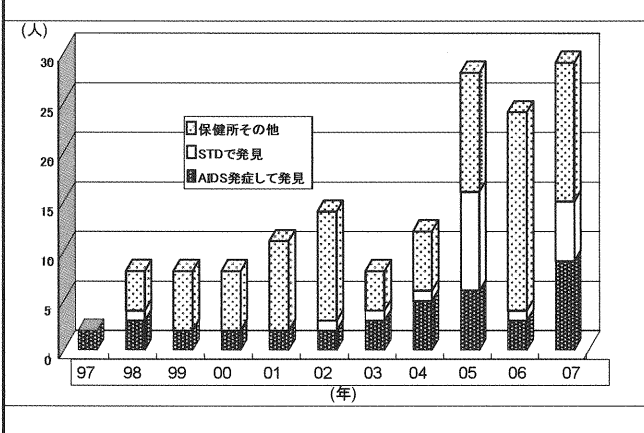


図6:LAFオリジナルコンドームパッケージの作成



図7:LAF作成コミュニティペーパー

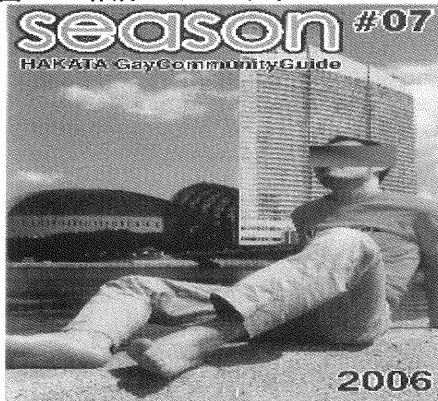


図8:コミュニティ内における啓発活動
～ゲイバー等商業施設利用者を対象とした勉強会～



図9:コミュニティ内における啓発活動
～LAF研修会～



図10:コミュニティ内における啓発活動
～STI予防に興味がない層に対する参加型啓発イベント～

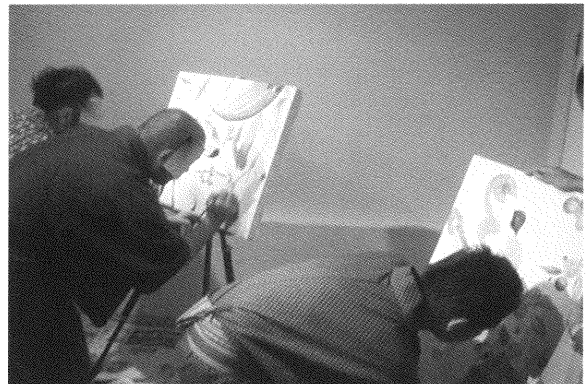


図11: 予防啓発を目的としたコミュニティ活性化案

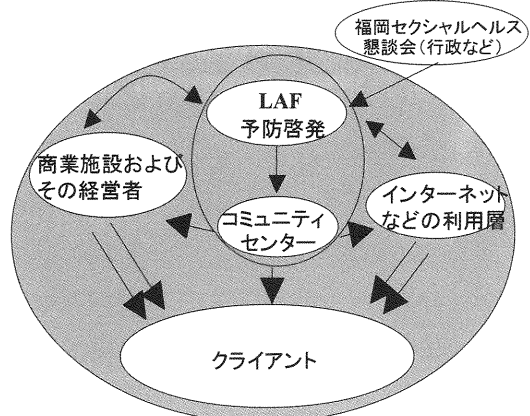
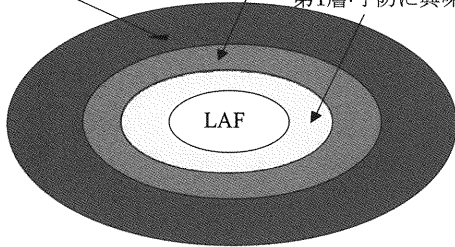


図12:コミュニティセンター「haco」の開設



図13: LAFを中心としたコミュニティのイメージ

第3層: コミュニティとの接点はあるが予防にはあまり興味がない層、hacoやLAFとの接点のない層
第2層: hacoやLAFと少し接点のある層
第1層: 予防に興味がある層



第4層: 円外の層で、コミュニティとの接点がない
hard-to-reach層

総合研究報告
(主な評価調査報告)

2005 年-2007 年 NLGR・HIV 抗体検査会の受検者特性の推移 —受検者への質問紙調査結果から—

研究協力者：金子典代（名古屋市立大学大学院看護学研究科/エイズ予防財団）、
内海眞（高山厚生病院、国立名古屋医療センター）、Angel Life Nagoya(CBO)、
市川誠一（名古屋市立大学大学院看護学研究科）

研究要旨

本研究の目的は、2005 年、2006 年、2007 年の NLGR・HIV 抗体検査受検者に実施した質問紙調査のデータをもとに、受検者の基礎属性や過去の検査受検行動、受検動機、ゲイ向けサービスの利用、性行動とその関連要因の実態の推移を明らかにすることである。

2005 年は 396 名、2006 年は 461 名、2007 年は 519 名からの有効回答を収集し、回収率は 95% を超えていた。基礎属性の分布は 3 年間を通して著名な変化は見られず、東海地域に居住する 20-30 歳代の MSM が最も多く 75%以上を占めていた。過去 1 年間に HIV 抗体検査を受検したものが 3 年ともに全体の半数近くを占めていたが、その受検場所としては前年の NLGR を挙げているものが最も多く、過去 1 年の検査受検者のうちの 70%近くを占めていた。生涯初めて検査を受検するものは、受検経験があるものと比較してお友達を通じて検査会を知ったものが多く、友達と一緒に受けるから、情報に触れて心配になったことを受検理由に挙げるものが多かった。Angel Life Nagoya の予防啓発プログラムへの参加や認知は年齢が高い方が高く、携帯系出会い系サイトの利用は若者層の方が高かった。セックス時の併用品や利用するゲイ向け施設等にも経年変化が見られ、薬物の過去 6 ヶ月の使用とゲイバー・クラブの利用は、2005 年と比較して 2007 年は低かった。

生涯で初めて検査を受検するものは毎年約 25%にとどまり、過去の HIV 抗体検査受検経験は、NLGR を挙げるものが毎年最も多く、連続受検者も増加しており、地域での保健所等の検査利用に結びつきにくい実態が明らかとなった。このことは、継続的に無料の臨時検査会を連続実施することの欠点であるとも考えられる。また、臨時に開催する検査会は継続が保障できるものではないため、今後は地域で提供されている検査サービスをより利用しやすいものにすることが求められる。特に 2007 年の調査結果から、MSM の保健所の HIV 抗体検査の受検を希望するものの割合は高く、現在の保健所検査の利用の最も大きな障壁となっている、検査日や時間が限定されていることを解消すれば、より多くの受検者が地域の保健所を利用する可能性が示された。本年度の研究で明らかになった、東海地域に居住する MSM のニーズをふまえ、より MSM が受検しやすい検査体制への整備と利用者拡大に向けた情報提供を行っていく必要がある。

A. 研究目的

2005 年から 2007 年にかけて実施した調査の目的は、主に下記の 3 点である。

1. 検査会の受検者の基礎属性、過去の検

査行動、地域の保健所等のエイズ検査の認知や利用とニーズ、検査会の受検目的、知ったきっかけを明らかにすること

2. 受検者のゲイ向けサービスの利用、CBO 活動の認知、陽性者の身近さを明らかにすること
3. 過去 6 ヶ月の性行動、コンドーム使用とリスク認知や予防行動への態度の実態を明らかにすること
4. HIV 陽性や性感染症の既往歴を有するものの性行動、検査受検経験などを明らかにすること

B. 研究方法

2005 年から 2006 年は、受検者の採血終了後にスタッフが質問紙を手渡し、また 2007 年は NLGR・HIV 抗体検査会の 1 日目の受付時に、訓練を受けたスタッフから受検者に対して、質問紙を説明とともに手渡し協力を依頼した。アンケート回答用にスペースを確保し、スペース内での回答への協力を依頼した。質問紙の表紙に研究目的やプライバシーの厳守、研究データの取り扱い方法、学会等で結果を公表すること、参加や回答は自由である旨を明示し、内容を読み同意したのもののみに対して回答を依頼した。

質問紙は無記名であり対象者個人の特定につながる情報は含んでいなかった。なお、2005 年、2006 年の研究計画については、名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会より実施の承認を得た。

質問紙の調査項目は年齢や居住地、性的指向などの基本属性、生涯、過去 1 年間の HIV 抗体検査の受検、保健所等の検査の認知、受検、ニーズ、NLGR 検査会の受検動機、情報入手元、ALN 活動の認知や資材受け取り、参加、性行動、コンドーム使用状況、過去 6 ヶ月間に利用した商業施設の種類などであった。

検査行動や受検動機については、有効回答全数を分析対象とした。地域で提供されている保健所等の検査利用、認知、検査へのニーズに関しては、東海地域に居住する MSM のみに限定して分析を行った。性行動に関する項

目は、性指向をゲイまたはバイセクシュアルと自認し、男性と性行為の経験があると回答した MSM のみに限定し分析を実施した。

年齢別の比較を行う際には、年代を 29 歳未満、30-39 歳、40 歳以上の 3 群に分けて分析を行った。生涯の HIV 抗体検査の受検経験別の比較の際は、HIV 抗体検査を生涯で初めて受けるもの、すでに受検した経験があるものの 2 群に分けて分析を行った。分析時にクロス集計を行う際にはカイ二乗検定を用い有意水準は 5%を採用した。以下の研究結果は、3 年間の推移のみに焦点を当てて記載した。

C. 研究結果

1. 受検者の基礎属性

3 年間を通して、受検者の 80-85%が 20-30 歳代を占めていた。居住地は名古屋市、名古屋市を除く愛知県、岐阜県の順であり、その他全国各地に居住するものが受検する傾向も 3 年間変わらなかった。性指向は 3 年間を通してゲイを自認するものが 8 割以上を占め、9-10%がバイセクシュアルであった。

2. HIV 抗体検査の受検経験と認知

1) 過去の HIV 抗体検査受検と受検場所

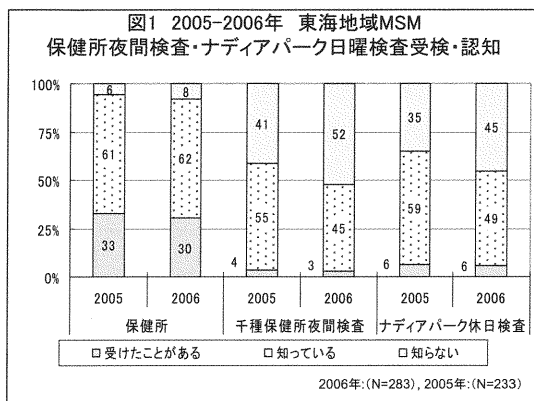
過去に HIV 抗体検査を受けたことがあると回答したものは、2005 年は 71%、2006 年は 74%、2007 年は 75%、毎回約 25-30%の受検者に対して生涯で初めての検査経験を提供していた。過去のエイズ検査経験回数も 2-5 回のものが過半数を占めていた。

2006 年と 2007 年共に全対象者の 40%以上が過去 1 年間に HIV 抗体検査を受検していた。また過去 1 年間に受検した者検査場所としては NLGR をあげるものが最も多かった。過去 1 年の検査場所として NLGR を挙げたものは減少傾向が見られた。

2) 保健所等の公的な HIV 抗体検査実施機関の利用と認知

東海地域に居住する MSM の保健所、千種保

健所の夜間検査、市がNGOに委託している休日検査の受検率、認知率を2005-2006年で比較すると著変は見られないものの減少傾向が見られていた(図1)。



3) 保健所 HIV 抗体検査の利便性

保健所の HIV 抗体検査の利便性をたずねたところ、「利用しにくい」と回答したものの割合が2005年は56%いたが、2006年は31%、2007年は35%と減少していた。利用しにくいと回答した者に限定し、理由を尋ねたところ「検査日が限定される」「検査時間が限定される」「検査通知までの時間が長い」が最も多い傾向は変わらなかった。

4) 希望する検査提供機関、時間、種類、立地条件、広告・評判について

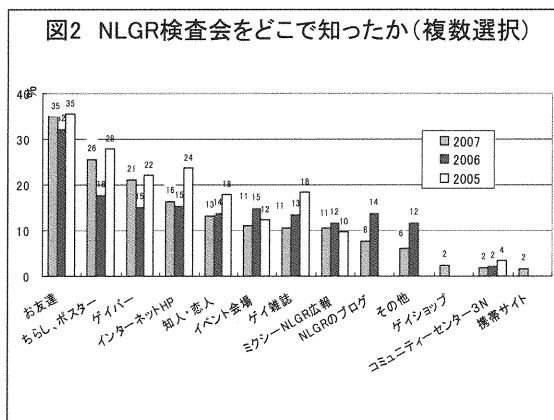
2007年には、東海地域に居住するMSMに限定し、最も希望する検査場所を尋ねたところ、イベント検査(60%)、保健所の検査(50%)を挙げるものが多く、時間帯は平日の夕方から夜間(35%)、休日の午後5時まで(31%)が最も多かった。

検査の種類は即日 HIV 抗体検査(57%)を希望するものが最も多かった。立地条件は名古屋駅・栄駅に近いこと(59%)、電車路線駅に近いこと(56%)を希望するものが多く、広告、評判に関しては、またゲイが多く受検している検査場所での受検を希望するものが多かった。

3. NLGR・HIV 抗体検査会の情報入手元、受検動機

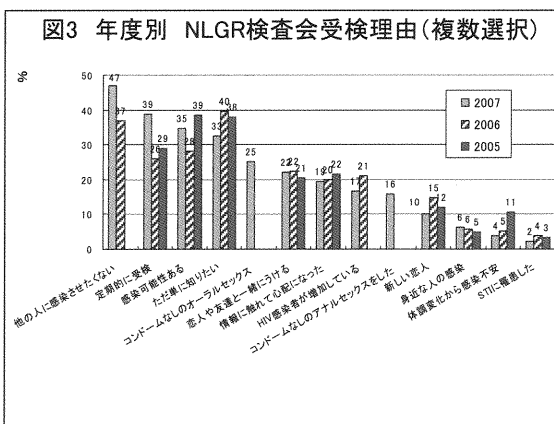
1) 検査会に関する情報入手源

NLGR・HIV 抗体検査会を知ったきっかけは「お友達から聞いた」が最も多く、次に「チラシ、ポスター」が続く傾向も3年間変わらなかった。インターネットやゲイ雑誌、コミュニティセンターで知った人の割合は減少傾向にある(図2)。



2) 受検動機

検査受検の動機は、「他の人に感染させたくない」「定期的に受検している」「ただ単にしたい」が最も多い傾向が続いている(図3)。



4. HIV に感染した友人の有無

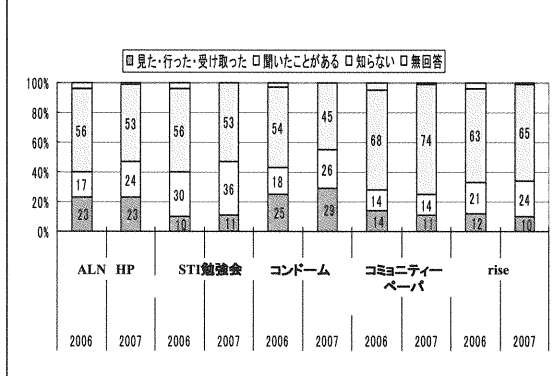
周囲に HIV に感染した友人の存在をたずねたところ、35%がいると回答し2006年と変化は見られなかった。

5. エンジェルライフ名古屋の活動の認知

エンジェルライフ名古屋の活動(コンドーム配布、WEB、コミュニティペーパー、コミュ

ニティーセンター、STI 勉強会) への接触度、参加、認知について 2006 年、2007 年と尋ねた。啓発用コンドームは 29%のものが受け取り経験を有しており、もっとも接触率が高く 2006 年と比較しても伸びが見られた (図 4)。

図4 エンジェルライフナゴヤ活動の認知



6. 性行動、コンドーム使用

1) 過去 6 ヶ月の性行動

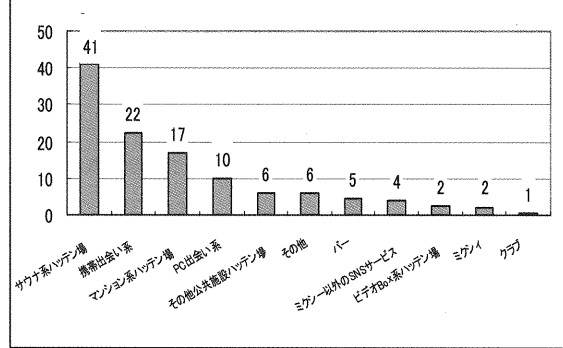
過去 6 ヶ月のアナルセックスの有無については、2007 年は 79%が、2006 年は 74%が、2005 年は 72%が「ある」と回答した。過去 6 ヶ月にアナルセックスの経験があるものうち、特定の相手とのセックスでのコンドーム常用割合は 3 年間で見ると 42-47%、その場限りの相手とのセックスでの常用割合は 62-64%の間で推移していた。

2) 最後のセックスの相手とコンドーム使用

最後のセックス時のコンドーム使用は、特定の相手とは 43-48%、またその場限りの相手とは 78-82%が「使用した」と回答しており 3 年間で著名な変化は見られなかった。

最後のセックスの相手がその場限りの相手であったものに対して、会った場所を尋ねたが (2007 年のみ) サウナ系ハッテン場が 41%と最も多く、携帯の出会い系サイトが 22%と次に多かった (図 5)。

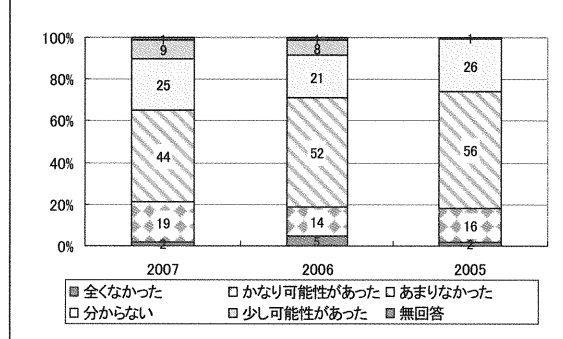
図5 最後のその場限り相手と会った場所 (2007年 N=171、複数選択)



7. 感染リスクの認識

対象者に自分の行動を振り返って、HIV に感染するリスクがどのくらいあったと思うかの問いに対しては「可能性があまりなかった」と回答した割合が減少傾向にあった (図 6)。

図6 HIVに感染する可能性の認識 (MSMのみ)



8. 予防行動に対する意識・態度

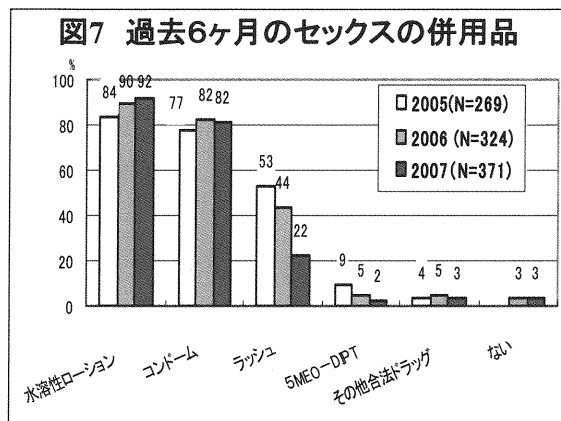
コンドーム使用など予防に対する意識、態度について尋ねた。「ゲイ友達の間でコンドーム使用が増加している」の考えには 2006-2007 年ともに 80%が同意していた。ドラッグ使用時はコンドームが使用しづらいという考えに同意するものは 47%から 36%に減少した。一方治療薬の出現により HIV 感染症を楽観視するものが多いことに同意する割合が 34%から 38%に増加した。

9. 過去 6 ヶ月のセックス時の併用品、商業施設の利用

1) 過去 6 ヶ月のアナルセックス時の併用品

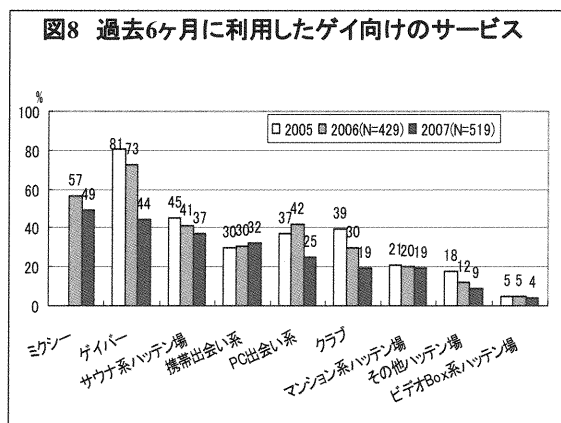
過去 6 ヶ月にアナルセックスの経験がある

ものうち、アナルセックス時の併用品を複数回答にてたずねた。水溶性ローション、コンドームを選択した者が3年とも最も多かった。ドラッグの使用経年的に減少が見られた(図7)。



2) 過去6ヶ月に利用した商業施設やサービス

過去6ヶ月に利用した商業施設はゲイバー、サウナ系ハッテン場、クラブの利用割合が下がっていた(図8)。



10. 年齢別にみた検査行動とニーズ、検査会の受検動機、ALN活動の認知度、予防行動の実態

1) 年齢が高いほど高い割合の項目

- ・ 保健所検査の受検経験
- ・ 生涯での検査受検経験
- ・ HIV陽性者の知り合いがいる割合
- ・ エンジェルライフナゴヤの活動の認知・参加
- ・ 過去6ヶ月のサウナ系ハッテン場の利

用割合

- ・ 治療薬の出現により HIV 感染症を楽観視するものが増えたことに同意する割合

2) 年齢が低いほど、高い項目

- ・ 保健所の検査が利用しにくい理由に、どのような対応をされるか不安と回答した割合
- ・ 友達から NLGR 検査会の情報を得た割合
- ・ 情報に触れて心配になったから NLGR を受検したと回答した割合
- ・ 過去6ヶ月にセックス時にラッシュを使用した割合
- ・ 過去6ヶ月にソーシャルネットワーキングサイト mixi を使用した割合

11. 検査経験別の比較

1) 検査経験があるものの方が、高い項目

- ・ 平均年齢
- ・ 通常保健所検査、夜間検査、休日検査の認知割合
- ・ 保健所検査の利用しにくい理由に「日時が限定されていること」、「結果通知までの時間が長いこと」をあげた割合
- ・ 過去6ヶ月のその場限り相手とのコンドーム使用割合
- ・ 今後、特定相手とコンドームを毎回使用したいと回答した割合
- ・ ALNの活動・プログラムの参加・認知割合
- ・ 過去6ヶ月のビデオボックス系のハッテン場の利用割合
- ・ ドラッグ使用時のコンドームが使用しづらくなるという考えに同意する割合

2) 検査経験を持たないものの方が回答割合が高い項目

- ・ 性的指向をバイセクシュアルと自認している割合
- ・ NLGR 検査会を「友達から聞いて知った」と回答した割合

- ・ NLGR 検査会の受検動機として「情報に触れて心配になったから」、「友達や恋人とうけるから」という理由を挙げた割合
- ・ 生涯を振り返って HIV に感染する可能性がどのくらいあったかについて「分からない」と回答した割合

D. 考察

2005 年から 2007 年にかけて、年齢、性的指向、居住地の分布は大きな変化が見られなかった。3 年を通して 20-30 歳代の東海地域に居住するゲイ・バイセクシュアル男性を自認している者が最も多く、今後も同様の広報やスケジュール体制で、検査会を実施した場合に来場する受検者層は大きく異なることが想定される。

過去に HIV 抗体検査を受検したものの割合は年々若干上昇傾向にあり、過去 1 年間に受検した場所としては前年度の NLGR が圧倒的に多い傾向も変わらない。いかに NLGR をきっかけに地域の保健所等で実施されている検査受検に結びつけることが出来るか、より多くの検査のニーズがありながら受検経験がなかったものに検査機会を提供するための方策を考えていく必要があるだろう。

保健所の検査、保健所の夜間検査、休日検査の認知は大きく変わらないが、保健所の検査を利用しにくいと回答した割合は 2005 年と比較して 2006 年 - 2007 年は減少していた。このことは、愛知県、名古屋市のエイズ検査の担当者は NLGR にもボランティアスタッフとして、また運営スタッフとして関わっており、地域での検査体制の整備にも力を入れている成果を示すものである可能性もあり今後詳細な検討が必要である。

希望する検査体制については、イベント検査または保健所での受検希望が最も高く、平日の夕方や夜間・休日検査の希望、種類としては迅速検査、通常検査と性感染症とセット

の検査、公共交通機関のアクセスが良いこと、ゲイが多く受検していることを望むものが最も多かった。検査体制の整備に当たっては、検査実施日と時間の拡大がもっとも大きなポイントとなる事が考えられる。

検査会の情報は友達から聞いた、チラシ、ポスターから知ったと回答するものが毎年最も多く、MSM 向けの宣伝戦略としては、口コミ力と紙媒体の利用が有効である事が考えられる。

エンジェルライフ名古屋の活動への参加、認知はコンドームの受け取り経験は増加傾向にあるものの、他のプログラムでは大きな変化は見られていない。今後コミュニティーセンターでのプログラムの認知拡大、コミュニティーペーパーなどの情報提供プログラムを強化する必要があるだろう。

感染予防行動には年次毎の変化は見られず、その場限りの相手と会った場所としては、サウナ形ハッテン場が最も多く携帯出会い系サイトを通じて会った者の割合も 2 番目に多かった。

セックス時の併用品についてはドラッグを過去 6 ヶ月に使用したと回答している割合が減少していた。法規制の影響も存在することが考えられるが、実際に使用が減っているのかについてはさらに研究を進める必要がある。

年齢別に各項目を比較すると、年齢が高いほど、保健所や生涯検査受検経験が高く、ALN の活動への参加・認知、陽性者の友人がいる割合も多かった。本検査会で受検する 30-40 歳代の層は比較的予防意識が高く、検査経験率も高い層が多いことが明らかとなった。

生涯の受検経験別に見ると、検査経験があるものの方が年齢が高く、その場限りの相手とのコンドーム使用割合や特定相手との使用意図が高かった。また、本検査会が、生涯で初めて受検であったものの方が NLGR 検査会を友達から聞いて知ったものが多く、情報に触れて心配になった、友達や恋人と受けるこ

とを受検理由として挙げているものが多かった。特に感染の機会がありながら、検査受検経験がなかったものへの検査機会の提供は重要となり、これらの未受検者層への効果的なアプローチ法を考案する際には友人など人的ネットワークの力、口コミの力を活用することが重要となる。

2007年の全受検者におけるHIV陽性割合は2006年より低下したものの、全受検者の基礎属性、受検経験や地域の保健所等の検査の利用や認知率には大きな違いは見られなかった。今後は、NLGRの受検をきっかけに地域で提供されている検査の利用が進むような体制を整備する必要がある。

またALNの活動やプログラムの参加・認知は年齢が高いほど高く、今後は若者層へも効果的に情報を普及・浸透させる必要がある

E. 発表論文等

(研究論文)

- 1) 金子典代, 内海眞, 市川誠一, 東海地域のゲイ・バイセクシュアル男性のHIV抗体検査の受検動機と感染予防行動, 日本看護研究学会誌, 30巻4号, p37-p43, 2007

(国際学会発表)

- 1) N. Kaneko, M. Utsumi, S. Ichikawa: HIV Testing Behavior and HIV Preventive Behavior among Gay and Bisexual Men in Tokai area Japan, The 6th International Nursing Conference, Nov, 2007, Seoul

(国内学会発表)

- 1) 金子典代, 内海眞, 市川誠一: MSM対象のHIV・STI検査の受検者の受検動機と予防行動, 日本エイズ学会, 2006年12月, 東京
- 2) 金子典代, 内海眞, 市川誠一, 東海地域の男性同性愛者のHIV抗体検査の受検動機

と性行動: 検査経験別の比較, 日本公衆衛生学会, 2006年11月, 富山

- 3) 金子典代, 内海眞, 市川誠一: 東海地域在住のMSMのHIV抗体検査受検行動とHIV検査体制へのニーズの実態, 第21回日本エイズ学会, 広島

HIV 検査機関における MSM の受検動向

研究協力者：岳中美江（特定非営利活動法人 CHARM/エイズ予防財団）、
市川誠一（名古屋市立大学）

研究要旨

MSM 受検者の動向を把握するため大阪・土曜日常設 HIV 検査事業において受検者に対して質問紙調査を実施した。質問紙調査の協力者全体のうち MSM 受検者は約 2 割（同性間性的接触を感染不安要因として受検した男性は 2004 年 333 人、2005 年 430 人、2006 年 373 人）を占めていた。

また、MSM 受検者中の質問紙調査の回答率から推定した MSM 受検者中の HIV 陽性割合は 3.9～4.7%、梅毒検査を受けかつアンケート回答が得られた MSM 受検者のうち TPHA 陽性結果と判定されたのは 9.5～13.2%、クラミジア抗体検査を受けかつアンケート回答が得られた MSM 受検者のうち IgG 抗体陽性と判定されたのは 9.9～11.7%であった。

例年 20 歳代、30 歳代が多くを占める一方で、2004 年に比べると 2005、2006 年には 40 歳代以上の MSM の割合が増えており、年齢分布にばらつきがみられた。

当検査機関について、MSM 受検者はインターネット以外からも情報を得ていることがわかった。特に MASH 大阪の啓発資材等が検査相談についての情報源になっていることが示唆された。

MSM 受検者の HIV 受検経験率は年々高くなっている傾向があり、心配なことがあってから比較的早い時期または定期的に、自身の感染リスクを意識して具体的な動機をもとに検査相談を利用している傾向にあると考えられる。過去 6 か月間のアナルセックスにおけるコンドーム常用率は 2005 年 36%に比べて 2006 年は 50.9%と高率になっていた。また、受検経験者のほうが初回受検者よりも過去 6 か月間のアナルセックスにおけるコンドーム常用率が例年高いことがわかった。しかし、受検することが健康行動に影響する可能性については今後の検討課題であると考えられる。

A. 研究目的

MSM への予防介入による効果を受検行動の側面から評価するため、検査機関（大阪・土曜日常設 HIV 検査事業）と共同で調査を実施した。大阪・土曜日常設 HIV 検査は、特定非営利活動法人 CHARM が大阪府・大阪市から委託を受け、毎週土曜日午後には大阪市北区堂山で HIV や性感染症検査を無料匿名で実施しているものである。この検査機関を本研究の対象に選んだ理由は、MASH 大阪が活動している地域に位置していること、MASH 大阪がこの検査機関を広報・紹介していること、MASH 大阪

が実施した臨時 HIV 抗体検査の終了後まもなく検査事業を開始したこと、検査の体制（質的内容）を充実する工夫が見られること、受検者に対して質問紙調査を実施していることなどである。MSM の一定の利用があるこの検査機関における受検者動向の把握により、MASH 大阪の啓発対象層の HIV/性感染症の感染状況や予防行動が観察できるものと思われる。本稿では 2004 年から 2006 年の MSM 受検者動向を報告する。

B. 研究方法

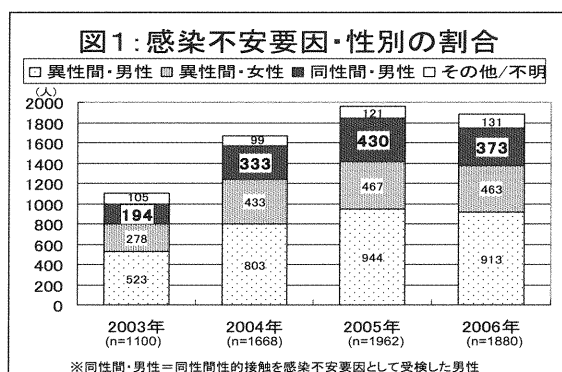
大阪・土曜日常設 HIV 検査において、無記

名自記式質問紙を受検者全員に配布し、採血日行程終了時に任意に記入してもらった。2004年1月～12月の受検者総数1925名のうち質問紙回答に協力が得られたのは1668名(有効回答率86.6%)であった。2005年1月～12月の受検者総数2212名のうち質問紙回答に協力が得られたのは1962名(有効回答率88.7%)であった。2006年1月～12月の受検者総数2126名のうち質問紙回答に協力が得られたのは1880名(有効回答率88.4%)であった。質問紙協力者のうち、同性間の性的接触を感染不安要因として受検した男性をMSMとして集計した。

C. 研究結果

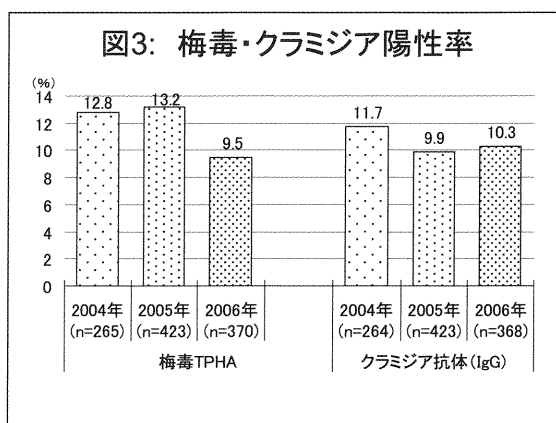
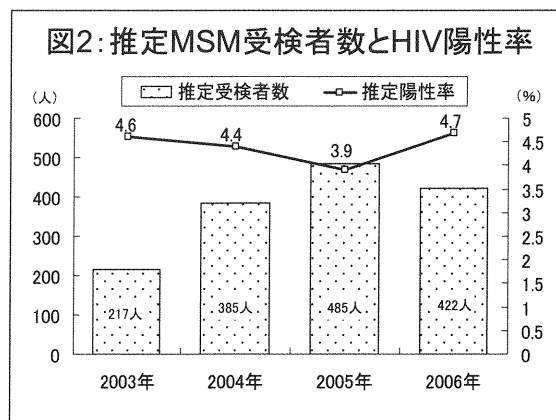
(付表1～3 大阪土曜日常設検査におけるMSM受検者に関する概要 結果参照)

質問紙調査の協力者のうち、同性間性的接触を感染不安要因として受検した男性(以下MSM)は2004年333人、2005年430人、2006年373人であった(図1)。



質問紙調査の回答率から推定したMSM受検者中のHIV陽性割合は3.9～4.7%であった(図2)。

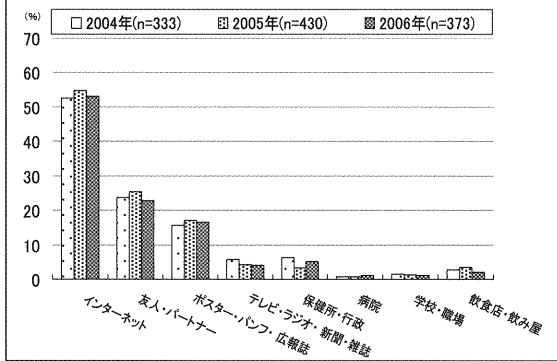
また、梅毒検査を受け、かつアンケート回答が得られたMSM受検者のうち、TPHA陽性結果と判定されたのは9.5～13.2%であった。クラミジア抗体検査を受け、かつアンケート回答が得られたMSM受検者のうち、IgG陽性結果と判定されたのは9.9～11.7%であった(図3)。



MSM受検者の年齢分布、居住地を表1に示した。年齢分布をみると、2004年は20代後半と30代前半が全体の半数以上を占めたが、2006年には20代前半・後半、30代前半・後半が大差ない割合になっており、分布にばらつきがみられた。2005年、2006年は40代以上も約2割を占めていた。居住地をみると、MSM受検者の65～70%は大阪、次いで兵庫であり、近畿全域からの利用がある。

この検査機関を知った情報源(複数回答)として、インターネット利用が過半数と最も高い割合になっている。MSM受検者はインターネット以外からも情報を得ている傾向があり、インターネットに次いで友人・恋人20%強、ポスター・パンフレット・広報誌15%強であった。また、飲食店・飲み屋で情報を得ているMSMもあり、MASH大阪やDISTA、SAL+という記載もあった(図4)。

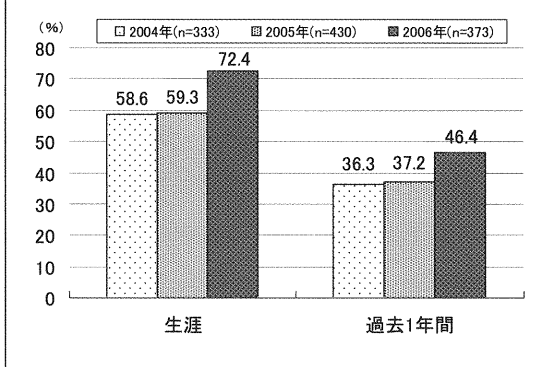
図4: 土曜検査の情報源 (MSM)



感染を心配する行為から受検までの期間は、MSM 受検者の約 90%が 1 年以内、2005 年、2006 年については、過半数が 3 ヶ月以内であり、MSM 受検者は心配なことがあってから短期間のうちに受検している傾向がみられた。

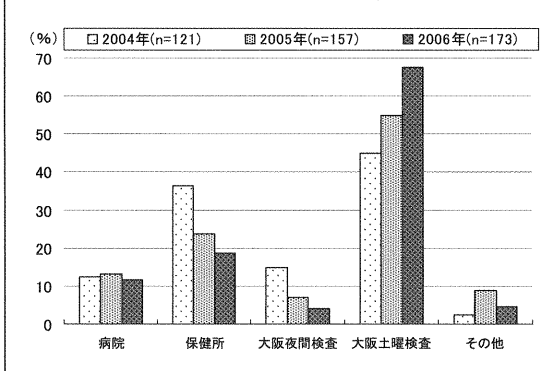
MSM 受検者の HIV 検査受検率は、これまで（生涯）59~72%、および過去 1 年間 36~46% であり、年々増加している傾向が見られた（図 5）。

図5: HIV検査の受検経験 (MSM)



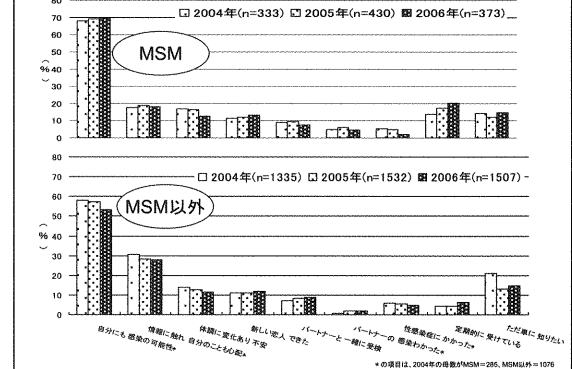
なお、過去 1 年間の受検場所については、土曜検査の割合の増加が見られた（図 6）。

図6: 過去1年間の受検場所



MSM 受検者の受検動機について、「自分にも感染の可能性がある」が最も高い割合であった。「定期的を受けている」および「パートナーの感染がわかった」は、MSM 以外の受検者に比べて高率であり、「定期的を受けている」は年々増加傾向にあった（図 7）。

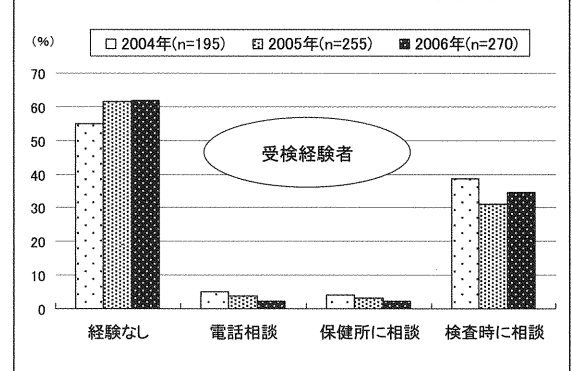
図7: 受検動機



また、自身の HIV 感染可能性について、毎年同様に MSM 受検者の約 40%が「可能性があると思う」としており、MSM 以外の受検者に比べて高率であった。

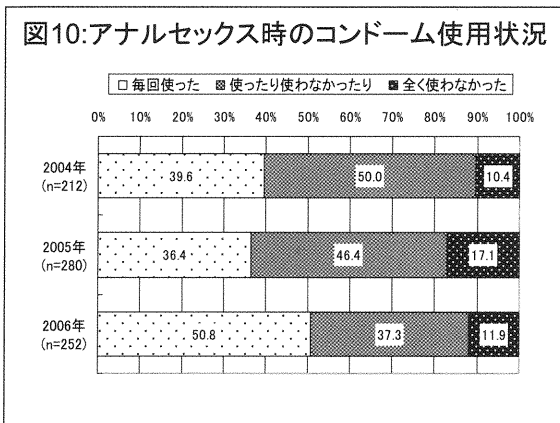
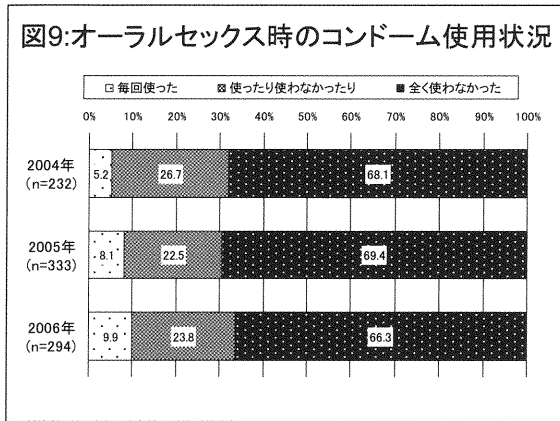
HIV 関連の相談をした経験についてみると、MSM 受検者のうちこれまでに受検経験のある者の 30~40%は検査時に相談した経験があった（図 8）。

図8: 受検経験者のエイズ関連相談経験

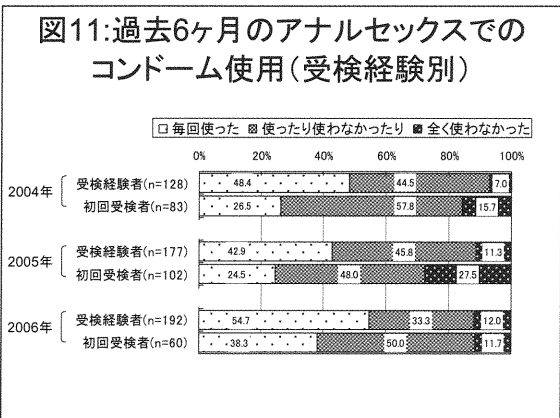


性行動についてみると、MSM 受検者の過去 6 ヶ月の性交経験率は 87~92%で、その相手（複数回答）は、恋人など特定のパートナーが半数以上で最も高率であり、次いで知人・友人、バーやクラブで知り合った相手、ネッ

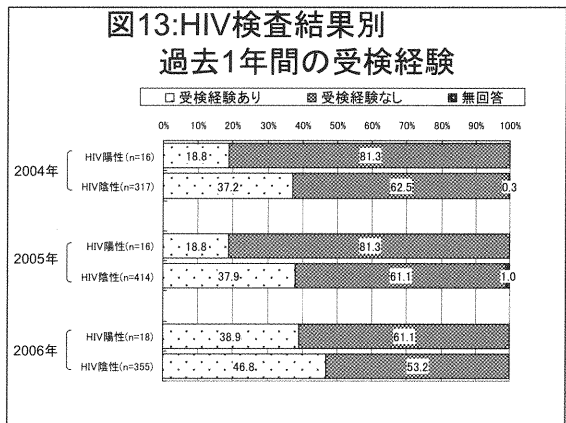
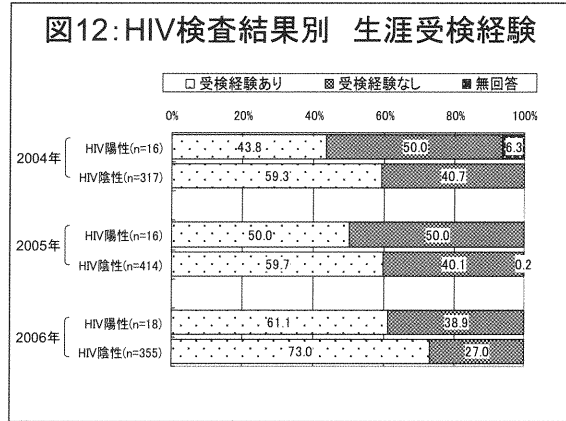
ト出会い系で知り合った相手であった。また、過去6ヶ月間のセックスにおけるコンドーム常用率は、オーラルセックスでは5~10%、アナルセックスでは36~51%であった(図9、図10)。



受検経験別(これまでに受検したことがある者と初めて受検した者)にアナルセックスにおけるコンドーム使用をみると、受検経験者の方が初回受検者よりもコンドーム常用率が高かった(図11)。



HIV 検査結果別に生涯受検経験および過去1年間の受検経験をみると、受検経験率が年々増加傾向にあるものの、HIV 陰性のほうが陽性よりも受検経験率が高かった(図12、図13)。



D. 考察

MSM 受検者の動向を把握するため大阪・土曜日常設 HIV 検査事業において調査を実施し、質問紙調査の協力者全体のうち MSM 受検者は約2割を占めていることがわかった。また、MSM 受検者中の HIV、梅毒、クラミジアの陽性割合が明らかになった。例年20歳代、30歳代が多くを占める一方で、2004年に比べると2005、2006年には40歳代以上のMSMも割合が増えており、年齢分布にばらつきがみられた。当検査機関について、MSM 受検者はインターネット以外からも情報を得ていることがわかった。特にMASH大阪の啓発資料等が検査相談についての情報源になっていることが示

唆された。MSM受検者のHIV受検経験率は年々高くなっている傾向があり、心配なことがあってから比較的早い時期または定期的に、自身の感染リスクを意識して具体的な動機をもとに検査相談を利用している傾向にあると考えられる。また、受検経験者のほうが初回受検者よりも過去6か月間のアナルセックスにおけるコンドーム常用率が例年高いことがわかった。受検経験により常用率が高くなっているのか、もともと常用している人が多く受検しているのかは不明であるが、HIV検査結果別に受検経験をみると、陰性結果のほうが陽性結果よりも受検経験率が高い傾向がみられたため、受検することが健康行動に影響する可能性については今後の検討課題であると考ええる。

E. 発表論文等

国内学会発表

- 1) 岳中美江, 後藤哲志, 土居加寿子, 松浦基夫, 榎本てる子, 藤山佳秀, 市川誠一: 大阪・土曜日常設 HIV 抗体検査事業における受検者の動向, 第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2005 年, 熊本
- 2) 山中京子, 岳中美江, 岡本学, 榎本てる子, 土居加寿子, 横田恵子: HIV 抗体検査前後の個別相談～CHARM が実施した土曜抗体検査における相談活動の分析より, 第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2005 年, 熊本
- 3) 後藤哲志, 榎本てる子, 岳中美江, 土居加寿子, 松浦基夫, 藤山佳秀: 土曜日常設抗体検査事業～結果お知らせの経験 (2004 年度), 第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2005 年, 熊本
- 4) 岳中美江: 大阪土曜日常設検査事業における検査体制～検査体制構築の成果と課題, HIV 検査・相談の現状と今後のあり方シンポジウム, 第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2005 年, 熊本
- 5) 岳中美江, 伊藤悠子, 飯沼恵子, 榎本てる子, 岡本学, 後藤哲志, 土居加寿子, 松浦基夫, 山中京子, 藤山佳秀, 市川誠一: 大阪・土曜日常設 HIV 抗体検査事業における受検者の動向 (2005), 第 20 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2006 年, 東京
- 6) 岳中美江, 榎本てる子, 岡本学, 土居加寿子, 松浦基夫, 山中京子, 藤山佳秀, 市川誠一: 大阪・土曜日常設 HIV 検査事業における受検者の動向 (2006), 第 21 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2007 年, 広島
- 7) 岳中美江, 松浦基夫, 榎本てる子, 土居加寿子, 山中京子, 岡本学, 藤山佳秀, 市川誠一: 大阪・土曜日常設 HIV 検査事業における陽性結果受取から医療機関受診までの期間, 第 21 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2007 年, 広島
- 8) 松浦基夫, 岳中美江, 岡本学, 土居加寿子, 榎本てる子, 山中京子, 藤山佳秀, 市川誠一: 大阪・土曜日常設 HIV 検査事業における「結果お知らせ」担当者に対する研修体制, 第 21 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2007 年, 広島
- 9) 山中京子, 榎本てる子, 土居加寿子, 岳中美江, 岡本学, 松浦基夫, 青木理恵子: 大阪・土曜日常設 HIV 抗体検査が実施する陽性結果受取時カウンセリングに関する検討—専門カウンセラーが意識する支援視点の分析より—, 第 21 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2007 年, 広島

表 1. 大阪土曜日常設検査における MSM 受検者に関する概要(年別)

	2004(n=333)		2005(n=430)		2006(n=373)	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)
年齢階級(歳)						
15-19	18	(5.4)	28	(6.5)	13	(3.5)
20-24	51	(15.3)	83	(19.3)	62	(16.6)
25-29	87	(26.1)	83	(19.3)	82	(22.0)
30-34	92	(27.6)	80	(18.6)	69	(18.5)
35-39	42	(12.6)	57	(13.3)	60	(16.1)
40-44	10	(3.0)	25	(5.8)	31	(8.3)
45-49	5	(1.5)	19	(4.4)	13	(3.5)
50-54	4	(1.2)	12	(2.8)	3	(0.8)
55-59	4	(1.2)	10	(2.3)	9	(2.4)
60-	0	-	2	(0.5)	6	(1.6)
無回答	20	(6.0)	31	(7.2)	25	(6.7)
居住地						
大阪	216	(64.9)	281	(65.3)	254	(68.1)
兵庫	67	(20.1)	81	(18.8)	63	(16.9)
京都	18	(5.4)	25	(5.8)	27	(7.2)
奈良	15	(4.5)	13	(3.0)	8	(2.1)
滋賀	4	(1.2)	15	(3.5)	10	(2.7)
和歌山	2	(0.6)	2	(0.5)	2	(0.5)
その他	10	(3.0)	10	(2.3)	9	(2.4)
無回答	1	(0.3)	3	(0.7)	0	-

注) MSM 受検者とは感染不安行為が「同性間の性的接触」と回答した男性

表 2. 大阪土曜日常設検査における MSM 受検者に関する概要(年別)

	2004(n=333)		2005(n=430)		2006(n=373)	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)
感染不安行為経験場所						
日本国内	309	(92.8)	409	(95.1)	349	(93.6)
国外	2	(0.6)	3	(0.7)	3	(0.8)
国内と国外	21	(6.3)	18	(4.2)	19	(5.1)
わからない	1	(0.3)	-	-	1	(0.3)
無回答	-	-	-	-	1	(0.3)
感染不安行為からの期間						
90日未満	129	(38.7)	231	(53.7)	206	(55.2)
1年以内	165	(49.5)	160	(37.2)	141	(37.8)
1年以上前	33	(9.9)	34	(7.9)	22	(5.9)
無回答	6	(1.8)	5	(1.2)	4	(1.1)
土曜検査を知った情報源(複数回答)						
インターネット	175	(52.6)	235	(54.7)	198	(53.1)
友人・恋人	79	(23.7)	109	(25.3)	85	(22.8)
テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	19	(5.7)	18	(4.2)	15	(4.0)
ポスター・パンフ・広報誌	52	(15.6)	73	(17.0)	62	(16.6)
保健所・行政	21	(6.3)	14	(3.3)	19	(5.1)
病院	2	(0.7)	3	(0.7)	4	(1.1)
学校・職場	5	(1.5)	5	(1.2)	4	(1.1)
飲食店・飲み屋	9	(2.7)	15	(3.5)	8	(2.1)
受検動機(複数回答)						
自分にも感染の可能性*	194	(68.1)	297	(69.1)	259	(69.4)
体調に変化あり感染の不安	56	(16.8)	70	(16.3)	47	(12.6)
情報に触れ自分のことも心配*	50	(17.5)	81	(18.8)	67	(18.0)
パートナーの感染がわかった*	14	(4.9)	26	(6.0)	17	(4.6)
新しい恋人できた	38	(11.4)	52	(12.1)	49	(13.1)
恋人と一緒に	30	(9.0)	40	(9.3)	28	(7.5)
性感染症にかかった*	15	(5.3)	20	(4.7)	7	(1.9)
ただ単に知りたい	47	(14.1)	51	(11.9)	55	(14.7)
定期的に受けている	46	(13.8)	74	(17.2)	75	(20.1)
過去の HIV 検査受検経験						
これまで(生涯)	195	(58.6)	255	(59.3)	270	(72.4)
過去1年間	121	(36.3)	160	(37.2)	173	(46.4)
過去1年間の受検場所(複数回答)						
病院	15	(12.4)	21	(13.1)	20	(11.6)
保健所	44	(36.4)	38	(23.8)	32	(18.5)
市内夜間検査	18	(14.9)	11	(6.9)	7	(4.0)
当土曜検査*	48	(44.9)	88	(55.0)	117	(67.6)
その他	3	(2.5)	14	(8.8)	8	(4.6)
HIV 関連相談経験(複数回答)						
経験なし	242	(72.7)	330	(76.7)	268	(71.8)
電話相談した	12	(3.6)	11	(2.6)	7	(1.9)
保健所に相談した	8	(2.4)	8	(1.9)	6	(1.6)
検査時に相談した	75	(22.5)	80	(18.6)	94	(25.2)
自身の HIV 感染の可能性*						
まったくないと思う	1	(0.4)	7	(1.6)	5	(1.3)
あまりないと思う	40	(14.0)	40	(9.3)	55	(14.7)
少し可能性があると思う	134	(47.0)	214	(49.8)	171	(45.8)
可能性があると思う	107	(37.5)	158	(36.7)	135	(36.2)
無回答	3	(1.1)	11	(2.6)	7	(1.9)

注: MSM 受検者とは感染不安行為が「同性間の性的接触」と回答した男性

* のついた項目: 2004 年については 4 月~12 月の回答のみ(n=285)